

目 次

第 1 部 フィールド言語学と認知言語学

- 第 1 章 バスク語の名詞文・形容詞文の文法と意味 石塚政行 3
- 第 2 章 意図と知識—タガログ語の *ma-* 動詞の分析— 長屋尚典 23

第 2 部 中国語研究と認知言語学

- 第 1 章 中国語の攻撃構文における臨時動量詞の意味機能 李 菲 47
- 第 2 章 行為の評価からモノの属性へのプロファイル・シフトについて
—中国語の難易度を表す形容詞の事例から— 三宅登之 67
- 第 3 章 中国語主体移動表現の様相
—ビデオクリップの口述データに基づいて— 小嶋美由紀 91
- 第 4 章 中国語における直示移動動詞の文法化
—[動作者名詞句 + 来 + 動詞句]の“来”の意味と文法化の道筋—
..... 相原まり子 117

第 3 部 語用論と認知言語学の接点

- 第 1 章 認知言語学と関連性理論 西山佑司 145
- 第 2 章 なぜ認知言語学にとって語用論は重要か
—行為指示の動詞と項構造— 高橋英光 171
- 第 3 章 日本語の語用選好と言語特性
—談話カプセル化を中心に— 加藤重広 191
- 第 4 章 提喻論の現在 森 雄一 215

第4部 言語変化と認知言語学

第1章 認知言語学と歴史語用論の交流を探る

— MUSTの主観的義務用法の成立過程をめぐって— 眞田敬介 239

第2章 譲歩からトピックシフトへ—使用基盤による分析— 大橋 浩 261

第3章 ノダ文の通時態と共時態 野村剛史 285

第4章 副詞の入り口—副詞と副詞化の条件— 小柳智一 305

第 1 章

バスク語の名詞文・形容詞文の文法と意味

石塚政行

キーワード：バスク語，認知文法，コピュラ文，形容詞，定冠詞

1. はじめに

本章では、バスク語¹の名詞述語文・形容詞述語文(以下、名詞文・形容詞文と呼ぶ)の文法と意味について、認知文法を用いた分析を提示する。バスク語には、動詞や名詞と文法的に区別すべき品詞として形容詞が存在する。本章で扱う名詞文・形容詞文とは、名詞・形容詞と後置定冠詞の *a*(またはその複数形の *ak*) からなる補語をとる措定文(コピュラ文の一種)のことである。(1)は名詞文、(2)は形容詞文の例である。(1)の補語は名詞 *zurgin* と定冠詞、(2)の補語は形容詞 *alai* と定冠詞で構成されており、どちらも全体としては主語の指示対象(以下、単に主語と呼ぶことがある)の属性を述べるコピュラ文になっている。訳から分かるとおり、バスク語の名詞文・形容詞文は、日本語の名詞述語文・形容詞述語文、英語の *be* と名詞句補語・形容詞句補語からなる文におおむね対応する。

- (1) Gu-re aita zurgin-a da.²
 1PL-GEN 父 大工-DEF PRS.COP
 (父は大工だ) (cf. My father is a carpenter)

¹ バスク語は、バスク地方(スペインおよびフランス)を中心に話されている系統不明の言語である。能格型(または活格型)の格組織を持つが、統語的には対格性を示す。他動詞文の基本語順は SOV とされるが、情報構造による変動が見られる。動詞の直前に焦点が、その前に主題が置かれ、その他の要素は動詞の後ろに置かれる。

² 出典を明示していない例文は作例である。LBC という表記がある例は、バスク語アカデミーの Lexikoaren Behatokiaren Corpora (<http://lexikoarenbehatokia.euskaltzaindia.eus/>) から取った例である。

第2章

意図と知識

— タガログ語の *ma-* 動詞の分析 —

長屋尚典

キーワード：タガログ語，意図，知識，事象構造，記述言語学

1. はじめに

タガログ語は、フィリピン共和国マニラ首都圏およびその周辺地域で話されるオーストロネシア語族の言語であり、公用語として使用する話者も含めると話者数は1億人に迫る。この言語の動詞には、接頭辞 *ma-* を持つ形とそうではない形の二つの系列が存在し、形態論的にも意味的にも対立する。たとえば、無標動詞文(1)と *ma-* 動詞文(2)を比較しよう。(2)の *na-* は *ma-* の完了形である(注2参照)。本章で *ma-* 動詞には MA というグロスをふる。

- (1) B<in>uks-an ko ang pinto.
 <RL> 開ける -LV 1SG.GEN NOM ドア

(私はドアを(意図的に)開けた。)

- (2) Na-buks-an ko ang pinto.
 MA.RL-開ける -LV 1SG.GEN NOM ドア

(私はドアを(意図せずに)開けた。)

(私はドアを(なんとかして)開けた。)

例文(1)(2)はどちらも語根 *buk(a)s* を持つ動詞を述語として持っており、話者がドアを開けるという事態を表現している。しかし、無標動詞文(1)は意図的動作を表し、*ma-* 動詞文(2)は非意図的動作または困難の末の意図の達成を表現する¹。このような無標動詞と *ma-* 動詞の対立が、タガログ語では

¹ 本章では言語学用語としての *volition* や *intention* に対応する用語として「意図」「意図

第1章

中国語の攻撃構文における
臨時動量詞の意味機能

李 菲

キーワード：専用動量詞，臨時動量詞，道具，攻撃行為，二重目的語

1. はじめに

本章では中国語の「臨時動量詞」を取り上げ、それが生起する構文を通してその生起条件と意味機能を明らかにする。「臨時動量詞」は従来、動作の道具を表す名詞が動量詞（動作の回数を表す）に転用されたものとしてとらえられてきた。しかし、臨時動量詞はその他の動量詞と様々な面で違いを見せており、必ずしも動作行為の回数を表すためのものではないとも言われている。本章は、臨時動量詞が最も生起しやすい“V了—N”，“V了O—N”の両構文に注目し、これらが「人間への攻撃行為」を表すための表現であることを明らかにした上で、臨時動量詞句“—N”は「攻撃行為」そのものを指していることを主張する。

以下、第2節では通常の動量詞と異なる臨時動量詞の特徴を取り上げ、臨時動量詞と“V了—N”，“V了O—N”構文との関係について述べる。第3節では、臨時動量詞を単に「道具」とする見方は臨時動量詞がどのような場合に生起するのかを説明できないとした上で、李湘（2011）の記述をふまえ、“V了(O)—N”が「攻撃行為」を表す構文であることを明らかにする。第4節では“V了(O)—N”に現れる主な動詞と臨時動量詞を挙げ、構文の成立は動詞が表す動作が「攻撃行為」かどうかと密接に関わっていることを述べる。その上、動作の種類によってNの役割が異なるが、「攻撃」という観点から見た場合すべて「Nを使った一撃」を表していることを論じる。

第2章

行為の評価からモノの属性への プロフィール・シフトについて

—中国語の難易度を表す形容詞の事例から—

三宅登之

キーワード：行為，モノ，形容詞，難易度，プロフィール・シフト

1. はじめに

本章は、中国語の難易度を表す形容詞を例に取り、形容詞の中にはまず行為を前提としてその行為に対する評価を述べるタイプがあることを指摘する。次に、そのような形容詞が名詞性成分で代表される「モノ」を修飾したり、それについて叙述したりする場合は、その働きが、本来の行為への評価から対象のモノの属性を述べることへと移行しており、話者の表現の中でプロフィール・シフトが起きていることを論じる。

以下、第2節では中国語の形容詞“简单”と“容易”の相違点を紹介する。第3節では両者の相違点の本質を、プロフィール・シフトという観点から解釈する。第4節では行為の評価からモノの属性へのプロフィール・シフトが起きるメカニズムについて論じる。第5節では、行為を表す部分の言語化の問題を考察する。第6節は本章の主張のまとめである。

2. “简单”と“容易”の相違点について

2.1 中国語の類義語“简单”と“容易”

本章ではまずモデルケースとして、三宅(2014)で議論した形容詞“简单”と“容易”を取り上げる。

中国語の難易度を表す形容詞“简单”と“容易”は類義語として扱われることが多く、いずれも「簡単である、易しい」といった意味を表す。実際、次の

第3章

中国語主体移動表現の様相

—ビデオクリップの口述データに基づいて—

小嶋美由紀

キーワード：主体移動，動詞連続構文，動詞スロット，直示，構文選択

1. はじめに

人やモノが空間において位置を変える事象，すなわち移動は，人間を取り巻く社会，環境において最もよく見られる事態の一つであり，移動を表現しない言語はない。しかし，移動に関わる経路や様態といった意味要素を統語的にどう表現するかは言語によって一様ではなく，一定の基準に基づき二つあるいは三つに類型される (Talmy 1985, 1991, 2000, Slobin 2000, 2004, Matsumoto 2003 など)。本章はビデオクリップを使用した実験によって得られたデータをもとに，現代中国語の主体移動表現¹の特徴を，特に直示表現との関わりで浮き彫りにすることを目的とする。

以下第2節では，移動に関わる意味要素および Talmy (1985, 1991) による移動表現の類型を紹介する。第3節では実験方法とその目的を述べ，第4節ではデータの提示と問題提起をする。第5節において第4節で提起した問題の考察を行い，第6節で今回の実験結果を通して見えてくる中国語の類型について検討する。なお，本文中で中国語の形態素や例文を挙げる際には，日本語と区別するために“ ”をつける。

2. 移動に関わる意味要素と移動表現の類型について

移動事象は，移動物である「図」(figure)，図がたどる軌跡である「経路」(path)，移動に付随する「様態」(manner)，図の移動を特定するための基準

¹ 移動事象は，移動物が自らの意思で自律的に位置を変化させる自律移動事象と，使役主が移動物の位置変化を引き起こす使役移動事象に区別されるが，本章は特に前者の自律移動事象の表現，すなわち移動物を主語とする主体移動表現のみを扱う。

第4章

中国語における直示移動動詞の文法化

—[動作者名詞句 + 来 + 動詞句]の“来”の意味と文法化の道筋—

相原まり子

キーワード：文法化，中国語，直示，移動，“来”

1. はじめに

中国語の“来”は話し手の方向への移動を表す直示移動動詞であるが，“来”の中には物理的移動の意味を失い，文法化しているものもある。本章では，例(1)のような[動作者名詞句 + 来 + 動詞句]という構造に現れる文法化した“来”を取り上げてその文法的意味を考察し，物理的移動を表す“来”からこのタイプの“来”への文法化の道筋を推定する。

(1) “他是谁?”李志祥问温泉，温泉已经说不出一句话，尔红说：

“我 来fl 介绍 一下，他是温泉的哥哥，我是她嫂嫂。”

1SG LAI 紹介する ちょっと

(「彼は誰？」と李志祥は温泉に聞いたが，温泉はすでに一言も言葉を発せられない状態であったので，爾紅が「私が紹介します，彼は温泉の兄で私は温泉の兄嫁です」と言った。) (池莉『一去永不回』)

以下では，[動作者名詞句 + 来 + 動詞句]に現れる文法化した“来”を“来fl”，同じ構造に現れる物理的移動を表す“来”を“来ml”と表記し¹，動作者名詞句をNP_a，動詞句をVPと略記する。本章では，まず，第2節で先行研究の不十分な点を指摘し，第3節で“来fl”の意味を分析する。さらに，第4節で“来

¹ f, m はそれぞれ function, motion の頭文字であり，さらに数字の1を付けたのは，文中の他の位置に現れる“来”と区別するためである。相原(2017)においても文法化した“来”の機能を考察したが，そこで取り上げた“来”は前置詞句などの連用修飾成分や動詞句の後ろに現れる“来”であり，本章の考察対象である“来”とは異なる。

第1章

認知言語学と関連性理論

西山佑司

キーワード：認知言語学，関連性理論，生成文法理論，意味論，表意

1. はじめに

本章では認知言語学 (Cognitive Linguistics: 以下 CL と略記) と語用論との関係を、関連性理論 (Relevance Theory: 以下 RT と略記) の観点から論じる。この議論を通して、CL に内在する理論的な問題点を指摘する。

2. 認知言語学と関連性理論の親和性

CL が生成文法理論 (Theory of Generative Grammar: 以下 GG と略記) に対するアンチテーゼとして生まれたことはよく知られている。しかし、CL は語用論、とりわけ RT に対しては、GG に対するような徹底的な批判をあまりしていない。むしろ、CL は RT に対してはしばしば好意的ですらある。たとえば、認知言語学者、池上嘉彦氏は次のように述べる。

話者は自らの発話の時点において、自分の発話の意図からして自らにとって〈関連性〉(relevance)——応術語のつもりであるが、日常的な意味合いで受けとめていただいても十分であるし、もし〈語用論〉(pragmatics) をいくらか勉強したことがあるならば、そこでの使い方を読み込んでいただければ、なおさらよい——のある内容だけを言語化すれば、それで十分なのである。このことは言いかえれば、話者は言語化の対象とする事態に含まれる内容の中で、発話する自らにとって〈関連性〉のあるものとなしものをまず仕分けるといった認知的な営みをしなくてはならないということである。

(池上 2011: 23)

第2章

なぜ認知言語学にとって語用論は重要か

—行為指示の動詞と項構造—

高橋英光

キーワード：行為指示，項構造，発話行為，語用論

1. はじめに

『認知言語学 回顧と展望』（“Cognitive Linguistics: Looking back, looking forward”）を特集した *Cognitive Linguistics* 27(4) (2016) の中で、寄稿者の一人、Dąbrowska (2016) は「認知言語学の七大罪」を取り上げている。その一つは(社会)語用論的考察の欠如であり、別の寄稿者である Schmid(2016) も類似の見解を表明し、認知言語学は(社会)語用論側面をこれまで以上に積極的に分析に取り入れることを推奨する。これらの論考を踏まえ、本章は(社会)語用論側面を認知言語学分析に取り込む第一歩として文法構造の分析に発話行為を取り入れることは真の意味の使用基盤主義の実践になり、様々な知見を生み出すことを示す。

本章は、行為指示という発話行為が動詞とその項構造に及ぼす影響を論じる。これまで、動詞がとる項構造とその具現形はどのような動詞がどのような構文で使われるか次第で変異することが指摘されている (Croft 2012 を参照)。しかし動詞と項構造に発話行為が及ぼす影響はほとんど注意が払われていなかった。むしろ項構造とは統語論の問題、発話行為は語用論の問題として互いに無関係な現象と扱われてきた。以下では、典型的な二重目的語動詞とされる give と tell の英語の2つの行為指示文—命令文と can you 構文—における項構造を観察し、行為指示では独特の項構造をとり、さらに個々の行為指示文でも独特の項構造をとる事例を報告する。

以下、第2節では認知言語学と語用論の関係史を振り返る。第3節では意味論と語用論の峻別が引き起こす弊害の例として関連性理論による疑似命令文分析を紹介する。第4節は、なぜ認知言語学にとって語用論が重要な

第3章

日本語の語用選好と言語特性

— 談話カプセル化を中心に —

加藤重広

キーワード：語用選好，複雑系，前適応，引用，談話カプセル化

1. はじめに

伝統的な言語学の見方では、「言語」それ自体が自律的な体系であると見なされ、規則知識体系と形態群の知識をもとにして実際の言語運用がおこなわれるとするのが一般であった。このときの文法と運用の関係は、法律と判例の関係にもたとえられ(加藤 2004)るが、システムとしての I-language と使用態の蓄積としての E-language の対比も同じような dichotomy と言ってよく、単純に「文法が先、運用が後」とまとめることができる。しかし、認知言語学の usage-based grammar をはじめとして「運用が先、文法が後」とする考え方も広く受け入れられている。後者は、*Today's pragmatics is tomorrow's grammar.* などと象徴的に表される見方でもある。

本章では、複雑系、とりわけ複雑適応系の考え方を語用論の立場から取り入れるとどのような枠組みの基盤を確立できるかについて議論したうえで、加藤(2016)でいう統語語用論の立場から選好がどのように言語構造に影響しているか、また、選好の幅を言語特性がどのように決めているかについて、引用現象などの具体例を検討しながら論じる。

以下、まず第2節で語用論と文法論を含む言語研究を概観し、第3節で複雑適応系の考え方や成果を言語研究の観点から捉え直して論じる。あわせて予備的議論として統語語用論の考え方と文脈の設定についても簡単に触れる。第4節で日本語の音声言語における引用のあり方について「談話カプセル化」という理解を導入して提案をおこなう。第5節で結論と課題を述べて論を閉じる。

第4章

提喩論の現在

森 雄一

キーワード：提喩，シネクドキー，アドホック概念構築，自己比喩

1. はじめに

本章は、稿者が森(1998)以来進めてきた認知言語学的アプローチによる提喩(シネクドキー)論の現在地点を提示し、認知言語学外のアプローチとして関連性理論による「アドホック概念構築」と佐藤信夫の「自己比喩」についての議論との関わりを考察する。以下、第2節では、提喩の規定をごく簡潔に示す。提喩には類によって種を表す場合と種によって類を表す場合があるのだが、第3節ではその非対称性を論じた上で提喩の分類について述べる。第4節では、関連性理論による「アドホック概念構築」と提喩との関わりを、第5節では自己比喩と提喩の関わりについて考察し、まとめとして第6節を付す。

2. 認知能力から見た提喩と換喩の区別

提喩と換喩(メトニミー)をどのように位置づけるかということについては伝統的な修辞学においても現代の認知言語学においてもさまざまな考え方がある。この問題に関する諸説は、舩山(1998)において「隣接関係」、「全体-部分関係」、「類-種関係」の関係という観点から、以下のように手際よく整理されている。

- ① 「隣接関係」・「全体-部分関係」・「類-種関係」による比喩を各々別のものとする。
- ② 「隣接関係」を換喩、「全体-部分関係」・「類-種関係」を提喩と考える。
- ③ 「全体-部分関係」を換喩に含め、「類-種関係」には言及しない。

第1章

認知言語学と歴史語用論の交流を探る

— MUST の主観的義務用法の成立過程をめぐって—

眞田敬介

キーワード：MUST, 義務, 願望, 主観性と主観化, 古英語 motan

1. はじめに

認知言語学と歴史語用論は、いずれも、言語を実際の言語使用やコミュニケーションなどとの関わりから考察する。しかし筆者の知る限り、具体的な現象を通して双方を交流させる試みは多くはない¹。そこで本章では、認知言語学と歴史語用論の交流が言語変化研究にどのような貢献を果たし得るかを検討する。具体例として、第3節で導入するが、英語の根源的助動詞 MUST(以下、MUST)²の主観的義務³用法—話し手(S)が義務の源となり、誰か(Y)がある事態(A)を実現することをSが望んでいる場合に用いられる義務用法—がどのようにして成立したかを扱う。英語法助動詞の通時的研究は小野(1969), Goossens(1987), Traugott(1989), Sweetser(1990: 3章), Kaita(2015)など数多い。しかし、MUSTの主観的義務用法の成立過程を扱う研究はSanada(2013)以外ほぼない。

以下、第2節で認知言語学と歴史語用論を概観し、両者の接点をTraugott(1989など)の主観化に見出す。第3節ではMUSTの主観的義務用法と客観的義務用法を概観し、本章における主観性・主観化の定義を示す。第4

¹ Nerlich(2010)はメタファーとメトニミーを歴史語用論と認知言語学の双方から考察しているが、両理論の交流を積極的に試みたものではないと見受けられる。

² 大文字表記のMUSTは、古英語 motan, 中英語 mo(o)t, 初期近代英語以降の must の上位範疇を指すものとする。それぞれ(及びその具体例)を指す場合は小文字表記とする。

³ 「義務」や“obligation”の意味を「道徳的」「法律的」観点から定義する辞書もあるが、法助動詞研究ではそのような限定をせず広く「しなければならぬこと」と捉えることが多い(Lyons 1977: 824-825, Coates 1983 など)。本章も後者に従う。

第2章

譲歩からトピックシフトへ

—使用基盤による分析—

大橋 浩

キーワード：譲歩，トピックシフト，談話標識，使用基盤，文法化

1. はじめに

本章では、言語に対する認知的アプローチ¹が、文法化の分析に非常に親和性が高く有効であることを述べ、文法化の事例研究を示したい。

以下、第2節では認知的アプローチの基盤をなす言語観によると文法化の諸側面を自然に捉えられることを概説する。第3節以下では文法化の事例研究として譲歩の意味を持つ英語の表現が談話標識としての機能を発達させている例を論じる。まず第3節では先行研究を概観し、譲歩からの拡張例には興味深い共通点が見られることを示す。第4節では英語の *having said that* という表現を取り上げ、プロトタイプ的な譲歩の意味以外に、トピックシフトという談話標識の用法を持つことをコーパスからの用例をもとに示し、この発達の動機づけと言語変化研究における意味合いを述べる。第5節はまとめと課題である。

2. 認知的アプローチと文法化

語が本来持っていた語彙的な意味から次第に文法的な意味を持つようになる変化、また文法的意味からさらに別の文法的意味を持つようになる変化を文法化とよぶ (Hopper and Traugott 2003 など)。1980年代以降文法化研究は活況を呈してきたが、その中には認知的分析も多く、認知的アプローチは文法化研究への適用を通して理論的、実証的有効性を示してきたといえよう。

¹ 言語分析において人間の一般的な認知能力を重視するアプローチを本章では包括的に認知的アプローチとよぶ。

第3章

ノダ文の通時態と共時態

野村剛史

キーワード：ソシユール、通時態、共時態、ノダ文、ナリ文

1. はじめに

以下では、いわゆるノダ文を素材として、通時態と共時態の関係を考えてゆくこととする。ノダ文の通時態を考えるということは、いわゆる連体ナリ（以下ナリ文とも）について考えることでもある。第2節では、これまでの「ノダ文」研究の代表的なものをしめす。第3節では、ソシユールの「共時態と通時態の峻別」という考え方を検討する。第4節では、ナリ文とノダ文について基本事項を述べる。第5節では、中古のナリ文についてやや詳しく検討する。第6節、第7節では、通時態の共時態に対する優位性と、その困難性について指摘する。

2. ノダ文についての説明

ノダ文についての説明をうまく行うことは、なかなか難しい。いま、ノダ文についての現代の代表的な説明をざっと眺めてゆく。詳しくは、原著で確認されたい。

- ①山口佳也 「「のだ」の文のとらえ方」(1975)。『「のだ」の文とその仲間』(2005)所収。

「外で音がするのは雨が降っているのだ」のような「～のは～のだ」型をノダ文の原型とみなす。「～のは～のだ」型は、「同一関係や区分けを表す「AはBだ」という構造の文にほかならない」とされる。

- ②田野村忠温 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』(1989)。

ノダは「背後の事情」を表す、とする。

第4章

副詞の入り口

—副詞と副詞化の条件—

小柳智一

キーワード：様相性，量性，名詞，挿入句，連体修飾句

1. はじめに

本来は副詞でなかったものが、副詞に変化する文法変化(以下「副詞化」)がある¹。例えば、次のようなものである。

- (1) a. つゆ：名詞(露)→程度副詞(「少しも(～否定)」の意)
 b. すべて：動詞句(統べて)→量副詞(「全部」の意)

本章の目的は、副詞化する語句を考察し、どのような語句がどのように副詞化するかという副詞化の条件を明らかにすることである。

以下、まず第2節で、副詞とはどのような語類か、意味的特徴に着目して副詞の規定を行う。続く第3節で、その規定に従った時、副詞にはどのような種類があるか、副詞の外延の概略を示す。次に第4節で、副詞化がどのような場合に起こりうるか、副詞化の条件について考察する。最後に第5節でまとめを行う。

2. 副詞の捉え方

副詞化について考えるためには、副詞の外延(所属語類)を画定する必要があるが、これはきわめて難しく、くわえて副詞内部の下位分類も困難である。その困難さを反映してか、副詞分類には統一的な見解がない。代表的な

¹ これは自立的機能語を生産する機能語生産で、小柳(2018: 第5章)の「機能語化B」に当たる。